

〔追悼〕

追悼 川原栄峰先生

中 島 徹

川原栄峰先生は平成19年1月23日早朝永眠されました。享年86。

先生は四国の由緒あるお寺を継ぐべき人でしたが、西洋哲学の道に進まれ、仏教についての造詣を披瀝することは控えておられました。

昭和18年に早稲田大学哲学科の卒業を控えた先生は、卒業論文（主題はカントのアンティノミー論）を執筆中に徴兵検査を受け、卒業直後に入隊、砲兵隊に配属されました。戦後、修行のために高野山に登られましたが、請われて高野山大学で教鞭を取られました。昭和32年に早稲田大学法学部に移られ、48年に文学部教授に就任されました。

先生は長期にわたって文学部で『純粹理性批判』の演習を担当されました。学部の3年生にとってドイツ語で読む『純粹理性批判』は難関でした。履修した言語に関係なく「1ヶ月だけ猶予する。それ以後は区別しない」と宣言されて、学生は必死にカントの原文に取り組みました。先生の授業にかける熱意と緊張感に私はただ圧倒されていました。

昭和30年代の初めから先生は何度もドイツに赴かれ、その交友の広さは驚くばかりでした。折にふれてお話いただいただけでも、ヤスパーズとハイデッガー、またヴィッサーやヘンリッヒなどの名前がありました。とりわけハイデッガーにお会いになったことと、ヴィッサー教授との長年にわたる親交は先生にとって大きなことでありました。

ハイデッガーに深く傾倒された先生は、昭和56年にその研究の集大成と云うべき大部の著書『ハイデッガーの思惟』で学位を受けられましたが、

その後はニーチェの研究に主力をそそがれました。ハイデッガーに畏敬の念をいだかれていた先生は、ニーチェには子息に対するようなお気持ちもおありになったようです。しかし、先生が本当に意を用いられたのは翻訳であったと思います。数多くの翻訳をなさいましたが、先生のお仕事はまさに「骨身を削る」ものでした。当時研究室に在籍した加藤直克、那須政玄といっしょに私も先生からご指導をいただきました。翻訳した原稿を先生に見ていただくと、赤ペンで真っ赤になって帰ってきます。今度こそはと書き直して提出すると、また赤くなって帰ってくるということが続きました。川原研究室にはその後も多くの学生が在籍し、同じような指導を受けました。現在では考えられないことだと思えます。

ただ一つ残念なことは、先生がヤスパースにお会いになったときの印象が良くなかったことです。ヤスパースは先生のご質問に答えることなく、一方的に自身の考え（「原爆」についての議論）を述べていたそうです。それ以降、先生はヤスパースの著作は読まれても、親しみを感じる事ができなかつたようです。これは不幸なことでした。それでも先生は、昭和59年の日本ヤスパース協会の再発足にあたり鈴木三郎先生の要請で理事となられ、協会の発展に貢献されました。『コミュニケーション第7号』（平成4年11月）には「巻頭言」を寄せられています。

研究においても、学生指導においても、つねに「義務を果たす」というお気持ちが先生を動かしていたと思えます。それもごく自然になさっていたところに、幅広い分野で活躍する人びとを育てられた先生の真骨頂がありました。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。

国士舘大学教授